

have NP V-ingの特性： 構文の発生と拡張

Have NP V-ing Constructions in English:
A Dynamic View

現 影 秀 昭
GEN'EY, Hideaki

The *have NP V-ing* construction (henceforth, HNING) comprises several subconstructions. It is my contention that these subconstructions, especially “experiencer” constructions, “STAY”causative constructions, and resultative causative constructions, form a sort of ‘family’ of related constructions, standing in the basic - derivative relationship in the sense of Kajita (2004). I will also discuss the idiom *have it coming to NP* might be an idiomatic specialization of the “resultative” HNING. Then I will show some of “depictive” HNING’s in the sense of Brugman (1988) are based on causative HNING’s. Finally I propose that three functions, CONTROL, EXPERIENCE, and CAUSE, are of the same sort, differing only in the degree of “strength.”

1. 序

英語の*have NP V-ing* (以下、HNING) には下位構文があり、Wittgenstein (1955) でいうところの「家族的類似性」を有する集合を形成する。本論考では、下位構文のなかでも、「継続使役 (“STAY” causative)」、「経験(者) (experiencer)」、「結果使役 (resultative causative)」について記述に重点をおいて、動的文法理論の立場から分析する。¹⁾ 即ち①「継続使役」は、「経験(者)」が基本形で、*keep NP V-ing* (継続使役) をモデルとして、動的な展開の法則によって拡張し、②「結果使役」は「継続使役」を基本形として拡張したという仮説を論証する。また「経験

(者)」は、「状態 (STATE)」を表わす補部 (下位事象) をとるが、「継続使役」と「結果使役」は「事象 (EVENT)」を補部にとるという違いがあることを、影山 (1996) と Jackendoff (1997) に基づく語彙概念構造を用いて表示する (cf. Dieterich (1975))。3つの概念関数 CONTROL, EXPERIENCE, と CAUSE は、同じ種類のもので、「強さ」の程度において異なるだけであるということも併せて主張する。本論考の最終的な目標は、*have NP V-ing* の言語現象が、「可能な文法」についての「過程説」としての動的文法理論では説明できるが、生成文法に代表される「出力説」に基づく Dieterich (1975) や、Brugman (1995) の構文文法的な分析では説明が難しいことを示す

キーワード：HAVE、動的文法理論、現在分詞、構文拡張

Key words : HAVE, the Dynamic Theory of Language, the present participle, the extension of the construction

ことにある（梶田（2004）を参照のこと）。²⁾

2. 言語事実

本論考では、Brugman（1988）に基づいて、have NP V-ing構文を、存在、経験、使役、結果、イディオム、描写という少なくとも6つの用法に分類する。描写構文とは、Brugman（1988: 148ff.）によれば「主節の主語が非現実世界で起る事象を作り出す」と定義される。なお〔 〕は小説や新聞から採った例文の出典を示し、言語学者の論文中の例文からの引用は（ ）に入れ区別してある。

- (1) a. The wall has some paintings on it.
(存在)
- b. cf. There are some paintings hanging on the wall.
(Emonds (1976: 110))
- (2) a. With any luck I'd run them broke and have them begging me to come back.
(使役)
[1957 Heinlein *The Door into Summer*, A Del Ray Book, p.72, my emphasis]
- b. I don't know about you, but if I'm told to be seriously frightened by an evildoer, especially the top evildoer, I want that evildoer to have all his bodily functions working at 110 percent! (継続使役)
[2003 Michael Moore, *Dude, Where's My Country?*, Warner Books, New York, p.19, my emphasis]
- (3) - wait - I have an idea coming. (経験)
[1938 Christie, *Murder on the Orient Express*, Part III, Ch.2.]
- (4) I piddled along with the help of the shop mechanics until I had Frank looking less a

three - car crash and more like something you might want to brag about to the neighbors. (結果使役)

[1957 Robert A. Heinlein, *The Door into Summer*, Ch.2, A Del Ray Book, p.49, my emphasis]

- (5) a. You have some very poignant stories in your book that had me rolling in the aisles. (イディオム／結果使役)
[2004 An Interview with Michael Breen, Actor's Studio, my emphasis]
- b. I remembered ol'Sick had it coming to him.
[1978 Forest Carter, *The Education of Little Tree*, Ch.4]
- (6) Chandler has Marlow being relentless in his pursuit of the truth. (描写構文)
(Brugman (1988: 151))

3. 先行研究の問題点：Dieterich（1975）、Brugman（1988）

Dieterich（1975）は、NP₁ have NP₂ V...という統語形を持つhave構文について考察し、①「使役主」have構文（例えばJohn has a cake baking.）と、「経験者」have構文（例えばJohn has a tooth missing.）を区別し、②両者が文を目的語補部にとる構造（例えばJohn [_{VP} has [_S John be baking a cake]])から派生すると仮定し、③特にJohn has a cake baking.が使役進行形John is baking a cake.と同義であることを構造の上で捉えている。

Dieterich（1975）の問題点は以下の通りである。第一に、Dieterich（1975）はhave構文一般を扱っているのので、have NP V-ingに特有の現象が見落とされている。第二に、なぜhave NP V-ingという統語形が経験、使役、

結果という3つの意味をもつに至ったのかということが説明されない。第三に、存在文と have NP V-ingが密接な関係にあり、存在と所有 (のhave) もまた密接な関係にあるという事実が捉えられない。

一般的なHAVE構文を扱った包括的な研究としてBrugman (1988) も挙げなくてはならない。Brugman (1988:17) は「形と意味のあらゆる組み合わせが構文として定義されるので、補文をとるHAVEとその意味・語用論の結びつきを記述したものを型ごとにまとめたものや (記述の) 具体例は、どれでも構文という用語を当てることになる」と主張している。またBrugman (1988:19) は、「構文文法のケース・スタディーとして、haveの結合価の多様性は他の言語に類を見ないので、HAVEは特にやりがいがある研究である」と明言している。BrugmanはGoldberg流の構文文法を念頭においているようである。しかしGoldberg (1995) では「persuade him to leaveのような複文による移動の表現はこの構文 [=使役移動] とは見なされていない (松本 (2002:188))。』HAVEは、Brugman (1988) によれば補文をとるわけであり、複文による使役表現 (もっと一般的には迂言的使役表現) であるので、Goldberg (1995) でいうところの「構文」とは見なされないことになる。Goldberg (1995) が構文という概念を設定する動機づけは「各動詞が所与の構文に生じることができるかどうかということを、動詞ごとに恣意的に指定することをさける (Goldberg (1995:164))」ことである。例えば、Goldberg (1995:154) によれば Frank sneezed the napkin off the table.において、自動詞sneezeに新たに「くしゃみを手段として物を吹き飛ばす」という意味を指定す

る必要はなく、動詞の基本的な意味と、使役移動構文の意味が統合して、この様な特定の表現の意味が生まれるというのである。一方、Brugman (1988) は、HAVEという動詞自体に多義性を認めているので、わざわざ構文ということに前面に押し出す必要はなく、Golberg流の構文文法の趣旨と大きく乖離している。また、Brugman (1988) のように形式と意味の結びつきを構文と見なすという立場自体は、伝統文法ですでに取られているもので目新しいものではない。さらに、Brugman (1988:190) は、補文のタイプに基づくHAVE構文の意味分類は提示しているが、Goldberg (1995) が主張する「構文はネットワークを形成し、特定の構文のもつ特性の多くを動機づけている継承関係によってリンクされている」ということを厳密に定式化したものではない点にも問題がある。最後に、Goldberg (1995) の構文文法自体については「何を構文として扱い、またどこまでを構文の特性とし、どこまでをそれを構成する単語の特性とするかに関しては課題が残されている (松本 (2002:187))」という批判もあり、そのまま受け入れるわけにはいかない (Boas (2002) にもGoldberg (1995) の結果構文の扱いについて批判がある)。

以上の問題点を克服することができる代案を以下に提示することにする。

4. 動的アプローチ

4.1. 所有のhaveと「存在」のhave NP V-ing

まず本論では (8a) の様な「所有」のhaveに基づく「存在」のHNINGは、何らかの状態を伴っているということの意味する概念WITHを使って (9) の様に捉える (この場合BEとWITHを合わせたものがhaveに相当

する)。

(8) a. You do not seem to realize that one may have friends awaiting one's arrival in London.

(Agatha Christie (1934) *Murder on the Orient Express*, Part II, Ch.15, my emphasis)

b. cf. There are friends awaiting your arrival? (*ibid.*)

(9) Syntax: NP₁ have NP₂ V-ing (PP)

Semantics: X BE [_{POSS} WITH [Y BE AT-_{STATE} V-ing [AT-X]]]

(cf. 影山 (1996:55-56))

4.2. 「存在」のhave NP V-ingから「経験」のhave NP V-ingへ

更に「具体的に何かを所有する (= 何かが存在する) ことは、抽象的に何かを所有 (すなわち経験) することである」というメタファーによって、存在のhave構文 (基本形) から経験のhave構文 (変種) へと拡張したと本論では仮定する。言語獲得の観点から、子供も所有のhaveの方を (経験のhaveに比べて) 先に何の困難もなく生成すると仮定することは極めて自然である。この際「所有」から、次の「経験」を表わす概念構造上への移行によって生じる変化は「所定の最小展開」であり、本論で仮定する動的言語理論の制約とも合致する。以下に論じる下位構文間の拡張についても、同様の制約に従うものとする。

4.3. 「経験」のhave NP V-ingから「使役」のhave NP V-ingへのモデルに基づく展開

次に「…させておく」という「使役」に準じるHNINGの意味は、経験を基本形とし、keep NP V-ingをモデルとして拡張した

という仮説を提案する。³⁾ 経験から使役への展開の傍証としてVisser (1984) が挙げられる。Visser (1984) によればhave使役は歴史的に比較的最近の用法だが、経験用法は古英語の時代から存在するという。Visser (1984: 2265 - 2266) はHNING自体には言及していないが、will / wouldと共起するhave (e.g. 'he wouldn't have her wear a solid garment.')の基本的な意味は経験 ('to have one's eyes upon = 'to see physically and mentally' = 'to experience') であると指摘している。従って 'I will have you wear a thick coat' = 'I want to see you wear a thick coat' のようなパラフレーズが成り立つという。更にVisser (1984: 2266) は、経験の付帯的な意味として使役の意味が加わり、getの意味に近づくこともあるとも述べている。⁴⁾

have NP V-ingの「～してもらっている」、「～させておく」という意味を概念構造に反映させるためには、Jackendoff (1990) のkeepの分析で用いられたSTAY (継続) 関数を、haveにも援用することが必要になる。動的な拡張の図式は以下の様になる。

●基本形：have NP V-ing (経験)

(10) a. Having two fathers teaching me, one a socialist and the other a capitalist, I quickly began to realize that the philosophy of the capitalist made more financial sense to me.

[1997 Robert T. Kitayama, *Rich Dad, Poor Dad*, Warner Books, New York, p.125, my emphasis.]

b. But nobody else has had a murderer walking through their compartment in the middle of the night.

[1934 Agatha Christie, *Murder on*

the Orient Express, Part II, Ch.14]

(11) Syntax: NP₁ have NP₂ V-ing (NP₁ / PP)

Semantics:

[[X CONTROL [_{STATE} Y BE [AT-[_{STATE} V-ing
|
EXPERIENCE
([AT-X])]]]]

●モデル：keep NP V-ing構文（使役）

(12) Louise kept Fred composing quartets.

(Jackendoff (1983: 198))

(13) Syntax: NP₁ keep NP₂ V-ing

Semantics:

[X CAUSE [_{EVENT} Y STAY [AT-[_{EVENT}
V-ing]]]]

●派生形：have NP V-ing（使役）

(14) George had a car waiting for us.

(Alexander et al. (1975), 小西 (1980: 703))

(15) Syntax: NP₁ have NP₂ V-ing

Semantics: [X CAUSE [_{EVENT} Y STAY [AT-
[_{EVENT} V-ing]]]]

（動詞の）意味の骨組みである語彙概念構造（Semantics）は分かりやすくするために細部は省いてある。骨組みをつくるのに用いる関数の1つであるCAUSEは「使役」という行為を抽象化した概念で、日本語では「させる」に対応する。またATは位置を抽象化した概念である。Jackendoff (1990: 197-198)によれば、動詞keepは「継続 (=STAY)」ないし「継続 (=STAY) の使役」を表わす「状況動詞 (circumstantial verb)」で、従属節 (=Circumstantial field)」を下位範ちゅう化するという。Jackendoff (1990) に従えば、「継続の使役」を表わすhaveは (15) の様な概念構造をもつことになる。なお基本形概念構造 (11) に仮定したBEはSTAYと同じ指定だが、EVENTではなくて、STATE (状態) を構成

する点異なる。

基本形となる (10) の様な「経験 (者) (EXPERIENCER)」タイプのHNING (の概念構造) は、当然のことであるが、動作主 (ないし行為者) XがXの経験の成立を直接的に左右するということを表わしている。なお概念構造上、(11) に示されるように、経験という概念を表わす意味述語EXPERIENCEは「状態 (STATE)」を補部にとる。例えば、(10a) は、haveの主語X (の持つ性質) が、父親YがXに教育を施すという状態をXが経験するという事態の成立を左右しているということを表わしている。(10b) は、haveの主語Xが (何らかの不注意な行動とったことが)、夜中に殺人者Yが (オリエント急行の) 車室を通り抜けていくという状態をXが経験する羽目になることを直接左右していることを表わしている。

派生形となる、(14) の様な「STAY使役 (“STAY” CAUSATIVE)」タイプのHNINGは、概念構造上、haveの主語Xの働きかけが、Yがある事態が継続するようにしたということを表わしている。具体的には、(14) は、概念構造において、George (X) が運転手/車の持ち主 (Z) に働きかけることで、Xは (Zの所有する) 車を (「私たち」(Y) のために) 待機させておくという結果を生じさせたことを表わしている。なお本論考では、EXPERIENCEは、特に主語が個人 (=人) である (14) の様なとき、概念構造でCONTROLの下位概念として位置づけられると考える。

(11) の概念構造を構成する (EXPERIENCE (経験) を下位概念として位置づけた) CONTROL (コントロール) は影山 (1996) で用いられているものである。影山 (1996: 86) は「X CONTROL Yは、XがYの成立を

直接的に左右する」と定義し、「Yの成立が含意された場合には、実質上CAUSEという意味に解釈される」と述べている。HNINGの基本形である「経験」(11)の概念構造ではCONTROLは「状態」は表わしても、「結果」の成立までは含意しない。その後のkeep構文をモデルとする動的な展開において、「結果」の成立が含意され、CONTROLは実質上CAUSE（使役）という意味に解釈しなおされるのである。

EXPERIENCE（経験）関数をCONTROLの下に位置づける理由は、影山（1996）では次の様に説明されている。

(16) a. *Catch a cold. (cf. Don't catch a cold.) (影山 (1996:88))

b. x CONTROL [BECOME [x BE AT z]]

|

EXPERIENCE

(影山 (1996:82, 88))

c. *Don't be catching a cold. (cf. I'm catching a cold.)

影山（1996: 86, 88）は、経験者主語を持つ動詞（16a）の分析で、「使役者が外項（x）になって内項（y）の成立を左右することができることをCONTROLという概念で表わし、経験者が外項になって否定的な自制（否定命令）しかできないEXPERIENCEを、CONTROLの下位概念として位置づけると、使役者も経験者もともに外項であることがうまく捉えられる（16b）。」と主張している。

これをHNINGにも援用することはそれほど不自然ではないと思われる。

(17) a. Have the crew crossing gantry for capsule ingress. (使役)

b. *Have a tooth missing. (Dieterich (1975:166)) (経験)

c. *Don't have a tooth missing. (cf.

Don't lose a finger.) (経験)

HNINGは「使役」の場合、肯定命令が可能である（17a）。また主語に「経験者」をとる場合は補文に示された結果を自ら招くように命令することはできない（17b）。これは（（16b）の様な概念構造を持った）経験者を主語にとる動詞（句）catch a coldと振る舞いがよく似ている（16a）。つまり、（10 a-b）は「コントロールHAVE（CONTROL - HAVE）」であり、CONTROLの下位概念としてEXPERIENCEが位置づけられているので、言語獲得の早い段階において、経験用法が確立し、その後展開の法則によってコントロールから使役用法が派生したという仮説を概念構造の表示にいいおいても捉えることができるわけである。⁵⁾ なお（17c）のように、「経験」のHNINGは否定命令にできないが、これは（16c）のようにcatch a coldの進行形を否定命令にできないのと同じである。Dieterich（1975: 174）が、（18）の様に進行形とHNINGがパラフレーズの関係にあると指摘している点にも注意されたい。

(18) John is running the water in the bathtub.

⇔ John has the water running in the bathtub. (Dieterich (1975: 174))

更に小節を従える使役のHNINGは使役の対象（目的語）を（keep程ではないが）ある程度コントロールできる。立場が上の政治家がお抱え運転手をコントロールしている（19）の例がその根拠となる。

(19) He [=a politician] had some feller driving his car for him, and he got out of the back seat.

[F. Carter, *The Education of Little Tree*, Ch.10]

これは、keepが小節を従える場合、小節の内容は主語によってコントロールされると内木場 (2004: 48, fn. 3) が指摘している事実と平行している。またJackendoff (1972: 30) によればkeepは所有の位置を表わし、(20) ではthe bookは主題であると分析するが、keepをhaveと入れ替えても同じ主題関係を表わす点に注目されたい。

(20) Herman {kept/has} the book.

(cf. Jackendoff (1972: 30))

その他haveとkeepが「同じ言語環境で、ほぼ同じ意味で」用いられている例が数多く存在する。

(21) a. A little further. Keep him coming.
Keep him coming. Right, I can almost reach him. Keep it comin'.

[Stuart Little, a screenplay]

b. 'I could not fail myself and die on a fish like this,' he said, 'Now that I have him coming so beautifully, God help me endure.'

[1952 E. Hemingway, *The Old Man and the Sea*, my emphasis]

4.4. 「使役」のhave NP V-ingから「結果」のhave NP V-ingへ

次に本論考ではHNINGの「結果使役」が「継続使役」(ないしそこから発展した「使役移動的HAVE」)を基本形として拡張したという仮説を提案する。

●基本形: have NP V-ing (使役)

(22) Flight, we have the crew crossing gantry for capsule ingress.



[Apollo 13] (使役)

●派生形: have NP V-ing (結果)

(23) a. In ten minutes she had them all crying.

[1927 Sincl. Lewis, *Elmer Gantry*]

(結果構文)

b. Have the roast cooking by 4'oclock, or dinner will be late.

(Dieterich (1975: 165)) (結果構文)

(24) Syntax: NP₁ have NP₂ V-ing

Semantics:

[X CAUSE [EVENT BECOME [Y BE AT-[EVENT V-ing]]]]

(cf. Goldberg and Jackendoff (2004: 540))

(23)が「結果構文」であることは、(23a)の様にアスペクトを限定する「時の副詞句 (in ten minutes)」を付加することができることや、(23b)の様にthe roast cooking by [4 o'] clockが「事象 (EVENT)」を記述していることから確かめられる。典型的な結果構文は、次の例が示す様に、達成した結果状態を示すので、時間的に限定された解釈しか許さないからである。つまり、時間的な限定を表わすin two minutesとは共起できるが、継続を表わすfor two minutesとは共起することはできない。

(25) The waiter wiped the table dry (in/*for two minutes).

(Levin and Rappaport Hovav (1995: 58))

「使役 (移動)」から「結果」への拡張は、Goldberg (1995: 88-89) が結果構文を使役・移動構文から拡張する際に仮定したのと同じ「場所の変化は状態の変化」というメタファーに基づく仮定する。拡張の際HAVEの主語が「使役主 (Agent)」から「刺激 (Stimulus)」へと切り替わる。「結果構文の主語は「刺激 (Stimulus)」であればよいからである (N.B. Brugman (1988: 175))。同時にアスペクト特

性が使役の [-telic] から結果構文の [+telic] に切り替わると仮定する (CAUSEの結果は状態変化だからである (N.B. 影山 (1996: 89))。「使役 (移動)」のHNINGが基本で、「結果」のHNINGが変種としてメタファーに基づいて拡張したと主張する根拠は、両者が同じ共起制限 ((Goldberg (1995: 82) の「単一経路制約」と類似の制約) に従う点にある。

(25) a. We have orders coming in from all over the world (*from New York).

(cf. *OALD* 6th) (使役・移動)

b. He had the water running into the bathtub (*into the kitchen below).

(結果)

4.5. イディオムhave it coming to NPについて

次にBrugman (1988) では触れられていないHNINGのイディオムhave it coming to NPの分析を示す。

(26) I remembered ol' Sick had it coming to him.

[1978 Forrest Carter, *The Education of Little Tree*, Ch.4]

(26) のencoding idiom (すなわち「構成性」があり、部分の意味が分かれば表現の意味も推測あるいは理解できるが、イディオムとしてその表現を丸ごと覚えないと慣習的な意味を持つ表現としては適切に使用できないイディオム) には、HAVEの主語NP₁が補文の主語NP₂から影響を受け、(HAVEの) 主語の意図性が欠けているので、「使役」ではなく「経験」の解釈が与えられる。Jackendoff (1997: 171) のことばを借りれば、(26) は、(27) のような「経験」構文がイディオムとなって特殊化したものとも呼べるものである。

(27) We shall soon have the mists coming

down on us. (小西 (1980: 703))

なおkeepにもgoという移動動詞を使ったkeep NP going (持ちこたえさせる) というイディオムが存在するのは偶然ではないと思われる。また進行形には感情的な色彩が含意されることが指摘されている (cf. 友澤 (2002: 147))。have it coming to NPの様なイディオムにも感情的な色彩 (「当然の報い」) が含まれている。

4.6. 描写構文としてのhave NP V-ing

最後に主節の主語が非現実世界で起こる事象を作り出す描写構文として、使役のHNINGの特性を継承している例 (28) を挙げておく (cf. Goldberg (1995))。このタイプはBrugman (1988) では触れられていないと思われる。

(28) Oh, I was very lucky with Wigand. I had a whole two-and-a-half, three-hour deposition that he'd given in Pascagoula, Mississippi. So I had him talking through the whole experience really, that he'd gone through, and I didn't really wanna meet Wigand for some reason.

(R. Crowe, *Inside Actors Studio*, 2003)

証言の記録から、主節の主語があたかも自分が尋問している非現実世界を再構成しているとでもいえる例である。

4.7. 働きかけの強さの度合い

本論考では、基本的なhave NP V-ing構文が導入されると、モデルに基づく拡張や、メタファーの動機づけによる拡張によって、派生的なHNING構文が形成されることを論じた。概念構造上は、上位事象と下位事象を結び付けるCONTROL、EXPERIENCE、CAUSE、と

いう3つの関数 (= 意味述語) を影山 (1996) および Jackendoff (1983, 1997, 2002: 360 ff.) に基づいて仮定した。本論考では、この3つの意味述語は、上位事象から下位事象に対する働きかけの「強さ」の度合いを示すものとする。すなわち、「経験」の HNING の概念構造を構成する CONTROL、EXPERIENCE は上位事象の使役主 (= 主語) の指示物が、下位事象において影響を受けるのであるから、主語からの働きかけが弱いと考える。CAUSE は上位事象の使役主の働きかけが、下位事象で状態変化に帰着するわけであるから、働きかけの度合いが一番強いことになる。

4. 結論と残された問題

本論では HNING の変種間に「存在」を基本形とする拡張関係があることを例証した。このことは、言語習得の結果としての大人の文法だけを問題とする生成文法では、それぞれを別個に派生するするしかなく、HNING の下位構文を離散的に捉えることはできても、下位構文が互いに連続体をなす「集合」であることや、どのようにして HNING の変種が成立したかということの説明できない。本論考では、基本的な have NP V-ing 構文が導入されると、動的な一般則が働きあつて、派生的な HNING 構文が形成されることを論じた。

最後に *make NP * (be) V-ing と have NP (*be) V-ing の統語上の違いを考察する。Ritter and Rosen (1993: 535-539) は、① have は VP を補部にとり、屈折要素がないので助動詞的な進行形や受身の be は認可されないが、② make は屈折要素が主要部となる補文 IP をとるので進行形や受身の be が認可されるという。しかし have が VP を補部にとり be を認可する屈折要素がないなら、(29) の様

な受身進行形の being も認可されないはずである。⁶⁾ 今後の研究課題としたい。

(29) I have a book being reviewed by Dwight MacDonald. (Dietrich (1975: 169))

注

* 拙論は日本英文学会第78回大会 (2006年5月21日、於・中京大学名古屋キャンパス) での私の口頭発表を加筆・修正したものである。拙論の執筆にあたって、梶田優上智大学名誉教授の東京言語研究所・理論言語学構座における連続講義から多くの有益な情報を得た。拙論の草稿に対しては、伊藤隆男氏より貴重なコメントや助言を頂戴した。ここに記して感謝申し上げる次第である。

1) 動的な文法理論の仮説は、可能な構文は可能な文法の出力としての構文の属性のみでなく、習得の過程を考慮すべきであるという主張を行う。これは次の様に定式化される:

(i) もしも言語 L の、ある習得段階の文法 G_i^L が属性 P をもつならば、次の段階の文法 G_{i+1}^L は、属性 P を持ちうる (梶田 (2004: 11))。

2) Chomsky の立場は、「わたくしが述べているのは理想化された場合 (idealization) であり、そこでは正しい文法が獲得される瞬間だけが考慮されている。(Chomsky (1965: 202, n.19))」に集約される。また Chomsky (1965: 21) が「HAVE 構文」のもつ解釈のあいまい性に気が付いていなかったわけではない。人間は母語について無自覚の知識を持っているが、それを意識にのぼらせる一つの手段として、構造上の曖昧性に気がつかせるということがあるということに言及している箇所、次の様な HAVE 構文が曖昧で、同一の構造が三通りの解釈を許す例を挙げているからである。

(i) I had a book stolen. (Chomsky (1965: 21))

しかし、Chomsky 自身は、HAVE 構文の解釈上のあいまい性を捉える「統語的な」分析を示していない。

3) 使役の make との類推は、HNING では働かないと考える。make は make + OBJ + V-ing という統語

形をとることができないことが、その根拠の一つである。

- 4) 早瀬 (2002: 239-241) は Visser (1984: 2265-2266) の同じ箇所を引用し、認知言語学の立場から、HAVE + NP + 現在分詞の使役用法が、経験用法を出発点として、知覚動詞との類推、will/would との共起を通じて使役動詞との類推により発達したと主張している。「話者が実際の言語使用を通じて、新規の用法を、基となる用法との類推に基づいて拡張し、カテゴリーのネットワークの中に取り込んでいく、という、常に働いているものとして言語の総体を仮定する (早瀬 (2002: 38))」認知言語学の用法基盤モデルとは異なり、本論考で枠組みとする動的文法理論は、単なる類推ではなく、(1つの段階の文法)「 G_i を所定の法則によって許される範囲内で、部分的に改めることによって、」(次の段階の文法)「 G_{i+1} へと展開していく」ような「展開の法則によって、順次形成できる文法のみが『可能な文法』である」ということを主張する (梶田 (2004: 11))。従って、基本形とモデル (keep NP V-ing) の形式と意味を受け継ぎながら展開の法則によって許される構文のみが派生的な構文として許される、と考える。また、動的文法理論は、「(人間が自然に取得できるように生まれついている) 可能な文法」は、出力としての大人の文法の属性のみでなく、習得の過程を考慮に入れなければ、規定できないという「過程説」を前提とする (梶田 (2004: 10-11))。本論考では、この仮説の証拠となる言語事実を多く挙げた。また早瀬 (2002: 240) で「使役用法」とされているものが、実は「結果構文」とあるということも示した。
- 5) BE関数からSTAY関数への拡張は、「状態」から「状態がもたらされるEVENT」への拡張と考えれば、連続体を成すので問題はないように思われる (cf. Jackendoff (2002: Ch.11))。
- 6) Quirk et al. (1985: 1207) によれば、have NP V-ing使役構文の受身形は許されないという。一方、keep NP V-ingは、受身が可能である。
- (i) a. She had us working day after day.
b. *We were had working day after day.

(Quirk et al. (1985: 1207))

c. cf. The whole of industry must be kept turning.

(Alexander, L.G. (1968) *For and Against*, 小西 (1980: 794))

参考文献

- Boas, H. (2003) A Constructional Approach to Resultatives, CSLI, Stanford.
- Brugman, C. (1988) The Syntax and Semantics of 'have' and Its Complements, Doctoral diss., University of California.
- Chomsky, N. (1965) Aspects of the Theory of the Syntax, Cambridge: MIT Press, Cambridge.
- Chomsky, N. (1995) The Minimalist Program, The MIT Press, Cambridge.
- Dieterich, T. "Causative HAVE," CLS 11, 165-176.
- Emonds, J. (1976) Transformational Syntax, Academic Press, New York.
- Goldberg, A. (1995) Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure, Univ. of Chicago Press, Chicago.
- Goldberg, A. and R. Jackendoff (2004) "The English Resultative as a Family of Constructions," Language 80, pp. 532 - 568.
- 早瀬尚子 (2002) 『英語構文のカテゴリー形成：認知言語学の視点から』 頸草書房。
- Jackendoff, R. (1972) Semantic Interpretation in Generative Grammar, MIT Press.
- Jackendoff, R. (1983) Semantics and Cognition, MIT Press.
- Jackendoff, R. (1997) The Architecture of the Language Faculty, MIT Press, Cambridge.
- Jackendoff, R. (2002) Foundations of Language: Brain, Meaning, Grammar, Evolution, Oxford University Press, Oxford.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 くろしお出版。
- Kajita, Masaru (1977) "Towards a Dynamic Model of Syntax," Studies in English Linguistics: To Akira Ota on his Sixtieth Birthday, eds. by M. Kajita, T. Nakao, and M. Ukaji, pp.44-76, Asahi Press.

- 梶田優 (2004) 「<周辺><例外>は周辺・例外か」
『日本語文法』 4. 2., 3-23.
- 小西友七・編 (1980) 『英語基本動詞辞典』 研究社
出版.
- Levin, B and Rappaport Hovav (1995) Unaccusativity:
At the Syntax-Lexical Semantics Interface, The
MIT Press, Cambridge.
- 松本曜 (2002) 「使役移動構文における意味的制約」
西村義樹・編 『シリーズ言語科学 2・認知言語
学 I : 事象構造』 東京大学出版会、187- 211.
- Pinker, S. (1989) Learnability and Cognition, The MIT
Press, Cambridge.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik
(1985) A Comprehensive Grammar of the English
Language, Longman, London.
- Ritter, E. and S. Rosen (1993) “Deriving Causation,”
Natural Language and Linguistic Theory 11, 519-555.
- 友澤宏隆 「英語進行形の概念構造について」 西村義
樹・編 『シリーズ言語科学 2・認知言語学 I :
事象構造』 東京大学出版、137- 160.
- 内木場 努 (2004) 『「こだわり」の英語語法研究』
開拓社.
- Visser, F. (1984) A Historical Syntax of the English
Langugage, Part III, Second Half, E.J.Brill, Leiden.
- Wittgenstein, L. (1955) Philosophical Investigations,
Blackwell, Oxford.